

May 10, 2026

母に慰められるように イザヤ 66:12-14

66:12 主はこう言われる。「見よ。わたしは川のように繁栄を彼女に与え、あふれる流れのように国々の栄光を与える。あなたがたは乳を飲み、脇に抱かれ、膝の上でかわいがられる。

66:13 母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰める。エルサレムであなたがたは慰められる。

66:14 あなたがたがこれを見るとき、その心は喜び、骨は若草のように生き返る。主の手はそのしもべたちに知られる。その憤りは敵たちに。」

一、厳しさと優しさ

皆さんには、子どものころ、父親から厳しく叱られたあと、母親から優しくしてもらった思い出がありますか。しくしく泣いているとき、父親に内緒で母親からおやつをもらったり、お小遣いをもらったりといったことがあったでしょうか。「父親に内緒で」と言っても、じつは父親も、子どもを叱ったあと、子どもに優しくしてやりたいのですが、その役割を母親に任せているのです。母親が子どもを甘やかしたからといって夫婦喧嘩にならないのはそのためです。子どもには厳しさと優しさの両方が必要です。厳しさだけでは子どもは、その後の人生で枝を伸ばすことができず、優しさだけでは根を張ることができません。

日本の宗教では、神々は人に対して厳しいだけの「怒りの神」と考えられてきました。人が田畑を耕しても、洪水がくればその苦労は台無しになります。雷が落ちれば森が焼

け、そこに住む動物の狩りができなくなり、木の実やキノコなどを収穫できなくなります。雨を降らせ、雷を起こす雲は、たいてい山から野へと下ってきますので、人々は高い山それ自体を「神」と考えてきました。山のふもとに鳥居を建て、祭りをするのは、神々をなだめるためでした。「さわらぬ神にたたりなし」という言葉があるように、日本人にとって、神は人を愛し、護り、導く存在ではありませんでしたから、人々も神を愛し、親しく神に祈り、神と心を通わせるなどといったことはなかったのです。

けれども聖書は、この自然を人のために造り、自然が生み出す豊かなもので人を養い、楽しませてくださる神を教えています。神は正しく、聖いお方ですから、聖書も神の厳しさを語っていますが、同時に神は、神の正しさに適わない者や聖さを汚した者にさえ、赦しを与え、あわれみ、慰めてくださるお方であると教えています。神は父のように厳しいだけでなく、母のようにも優しいお方です。母親が持つ優しさは神がお与えになったものだと言ってよいでしょう。

二、神の優しさ

旧約聖書は、神がアブラハムの子孫がエジプトで奴隷であったとき、彼らを奴隷から解放してご自分の民とし、パレスチナの土地を与えて国を建てられた歴史を綴ったものです。人々が神に信頼していたとき、国は外敵から守られ、平和で豊かでした。ところが、人々は神を捨てたため、首都エルサレムが神殿もろとも廃墟となり、人々はバビロンの地に捕虜となって連れて行かれました。

普通の国の歴史であればここで終わってしまうのですが、神

は、ご自分に逆らった民をもあわれみ、バビロンで捕虜となっていた人々をエルサレムに連れ返し、破壊された神殿を再建させ、城壁を修復し、エルサレムが再び栄えるようにしてくださいました。どこの国にもなかったことを神はしてくださったのです。

イスラエルの人々がバビロンからエルサレムに帰ったのは紀元前 538 年、神殿が再建されたのが紀元前 515 年ですが、そのことが起こる 150 年以上も前に、預言者イザヤはエルサレムが滅ぼされることと、それが再び建て直されることを預言しています。イザヤ 40 章以降にはエルサレム復興の預言がまとめられているのですが、それは「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——」という言葉で始まっています。そして、40 章からイザヤ書最後の 66 章まで、「慰め」という名詞と「慰める」という動詞があわせて 16 回も使われています。きょうの箇所では、神は、ご自分から離れた民を悔い改めに導き、回復してくださるだけでなく、その民を母親が乳呑み子をかかわいがるように、愛し、慰めてくださることが目に見えるように書かれています。「あなたがたは乳を飲み、脇に抱かれ、膝の上でかわいがられる。母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰める。」神は、どんな母親よりも優しく、その子どもたちを扱ってくださるのです。

三、神の慰めと私たち

では、このような神の慰めは、ただイスラエルの民だけに与えられたものなのでしょうか。いいえ、イザヤはイスラエルの回復だけでなく、救い主によってすべての民族がまことの神に立ち返り、この慰めが救い主を信じ受け入れるすべての人に注

がれることを預言していたのです。イエスはイザヤ 61:1-2 に「神である主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年、われらの神の復讐の日を告げ、すべての嘆き悲しむ者を慰めるために」とある部分を引用して、ご自分が聖書が預言している救い主であると宣言されました。そして、「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです」（マタイ 5:4）と言われ、イザヤが預言した「慰め」を実現してくださいました。イエス・キリストを信じて神に立ち返る者は誰でも、神によって「脇に抱かれ、膝の上でかわいがられる」のです。神は「あらゆる慰めに満ちた神」（コリント第二 1:3）です。「母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰める。」この言葉にある神の優しさ、慰めは、エルサレムの復興という歴史事実によって証明された確かなものです。そして今、イエス・キリストによって、もっと確かなものとなり、私たちのものとなっているのです。

母親は子どもを慰めようとしますが、ときに、疲れてしまうと子どもにつらく当たってしまうことがあるかもしれません。母親もまた慰めを受けなければなりません。家族を支える父親も同じです。また、他の人の世話をする人も同じです。私たちはみな互いに支え合って生きています。誰の世話も受けない、誰をも世話しない人はいないでしょう。私たちが父親のように他の人を支え、母親のように慰めを与えようとするとき、自分自身が神の力に支えられ、神の慰めを受けていなければなりません。それで聖書はこう言うのです。「どうか、私たちの主イエス・キリストと、私たちの父なる神、すなわち、私たちを愛

し、永遠の慰めとすばらしい望みを恵みによって与えてくださった方ご自身が、あなたがたの心を慰め、強めて、あらゆる良いわざとことばに進ませてくださいますように。」（テサロニケ第二 2:16-17） 私たちに必要なのは神の永遠の慰めです。

礼拝での祝福の祈り、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように」は、コリント第二 13:13 からとられたものですが、コリント第二 13:11 にはこうあります。「最後に兄弟たち、喜びなさい。完全になりなさい。慰めを受けなさい。思いを一つにきなさい。平和を保ちなさい。そうすれば、愛と平和の神はあなたがたとともにいてくださいます。」父、子、聖霊からの祝福には神からの慰めが含まれているのです。この礼拝で、「母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰める」と言われている神からの慰めを受けて、この週も歩みましょう。

（祈り）

父なる神さま、あなたは罪ある私たちが近づくことさえできない聖なるお方、完全に正しいお方です。しかし、同時に、愛とあわれみ、恵みと慰めに満ちたお方です。あなたは、私たちを赦し、聖め、癒やし、母に慰められる幼な子のように私たちに慰めてくださいます。私たちを常に、あなたの慰めの中に生かしてください。とりわけ、子どもたちのために労苦している母親たち、また、労苦してきた母親たちに豊かな慰めが与えられますように。イエス・キリストのお名前です。